国際化時代と横浜

田村　明

近代日本の出発は、日本の国際化、開国をもって始まる。安政元年（一八五四）ペリー提督は五百人の兵士を引きつれて横浜村に上陸し、日米和親条約を締結した。次いで安政五年にはすぐ横浜の前に浮かぶ米軍艦ポーハタン号の上で、日米修好通商条約を結び、翌安政六年には、急拠建設された横浜の町が世界に向けて開港する。

黒船来航以来わずか六年後のことであった。長い鎖国を打ち破る最先端の役割はいつも横浜が果たし、その後の文明開化といわれる日本の近代化の先頭を切り続けてきた。

黒船の来航は、太平の眠りにひたりきっていた幕府をはじめ、古い幕藩体制の支配層には大変なショックであったろう。しかし、民衆にとっては、おぼろげながら感じ、何となく待ちのぞんでいた来るべき時代の幕開きを見てとったのではないだろうか。上陸した外人たちを極度に警戒したのは固定観念にとらわれた武士たちで、民衆は敵意よりも大変な好奇心をもって接したようである。その好奇心が日本の新しい時代を創りあげてゆくエネルギーであった。

横浜は新しく集まってきた商人たちと、これも各国から集まった外国人で生まれた町で、文字どおり国際都市そのものであった。しかし、政治都市ではなく、貿易、情報の国際都市であり、さらに文化、学術、教育の国際交流を行ってきた。その推進者は因習にとらわれずに活性化された外国人たちと市民とである。それが東京との大きな相異である。石油、食料、原材料に見るまでもなく、わが国は今後とも国際会社の中に協調してゆくほか生きてゆけない国である。それには国レベルの外交や政治だけでなく、市民や自治体レベルの幅広い面からの国際交流が必要であろう。

横浜は始めからそのために生まれた町であり、それには現代の市民の力が未来へ向けて活性化していることが必要であろう。〈技監兼都市科学研究室長事務取扱〉